

柏井園と斎藤勇のジョージ・ハーバート

渡 辺 賢一郎

1. 序 論

17世紀イギリスの詩人ジョージ・ハーバートが英詩を愛好する日本の知識人に初めて詳細に紹介されたのは、1914（大正三）年、柏井園の『基督と人生』（北文館）においてである⁽¹⁾。柏井はこの本でハーバートの人物像を解説し、代表作*The Temple*に収録された数篇の詩に言及した。日本の読者にこうしてハーバートは知られることになったが、その後、少数の詩が英文学史の教科書や大学生用の語学テキスト、あるいは翻訳詩のアンソロジーなどに掲載されることはあっても、3部からなる*The Temple*の全体が訳書を通して知られるようになるまでには長い時間がかかった。鬼塚敬一氏が、第2部の“The Church”の訳書を1986年、第1部と第3部の“The Church-porch”と“The Church Militant”の訳書を1997年に、それぞれ『ジョージ・ハーバート詩集』、『続 ジョージ・ハーバート詩集—教会のポーチ・戦う教会』⁽²⁾というタイトルで上梓するまで、柏井の紹介以来実に80年以上もの間、日本の知識人には、ハーバートの代表作の全容を実際に作品を読んで知る機会は無かったのである。したがって限られた数の詩からハーバートは偏った理解をされることになった。

このような日本におけるハーバートの受容についてはすでに石井正之助氏の論考「最近のジョージ・ハーバート研究」（1978）がある⁽³⁾が、石井氏はハーバートの学術的な受容を中心にしている。そのため英詩を愛好する一般の知識人にハーバートがどのように紹介されたかについて、十分に明らかにされてはいないと考えられる。拙論はこのような日本の一般知識人のハーバート像を分析するために、大正から昭和初期にかけて柏井園と斎藤勇によって形作られたハーバート像の受容を考察する。この二人に注目するのは、日本の知識人に長く影響を与えたハーバート像を形作ったと考えられるからである。この当時出版された主要な英文学史の書物や、語学テキスト、また翻訳詩集などを見ることで、どのような詩が、どのように紹介されたかを分析し、またそこに記されているハーバートの詩風の解説を考察する。これらの資料から浮かび上がる当時の一般の日本人にとってのハーバートとはどのような詩人であっただろうか。

2. ジョージ・ハーバートという詩人

最初に現在、学界で一般に理解されているハーバートを見ておきたい。ジョージ・ハーバート(1593-1633年)は、ケンブリッジ大学を卒業後、世俗の道にいったん進みかけるが、宗教家となり、ベマトンで国教会の牧師として39歳の生涯を終えた。主要な著作に長短160篇あまりの詩を収録した*The Temple; Sacred Poems and Private Ejaculations*、牧師の心得を説いた散文*A Priest to the Temple, Or, The Country Parson*、またことわざ集*Outlandish Proverbs*などがある。ほかに*Musae Responsoriae*、*Passio Discerpta*、*Memoriae Matris Sacrum*などにはラテン語と少数のギリシア語の詩を書いている。代表作*The Temple*は、1633年に出版され、その後3年の間に4版を重ねるほど広く読まれた本であった。この詩集は一貫して宗教的な主題を扱うが、韻律を含めたその形式や技巧の多彩さは、作者の詩人としてのすぐれた手腕また様々な手法の実験を示している。たとえば“The Altar”や“Easter Wings”のように詩形が対象物をかたどった詩があるほか、“Heaven”のようなエコー詩⁽⁴⁾も書いている。このようにハーバートは詩の内容は宗教的で、詩の形式は多様であるという、ふたつの特徴を持った詩人である⁽⁵⁾。

3. キリスト教と英米文学

このような詩人ハーバートを初めて本格的に日本の知識人に紹介したのは、柏井園の『基督と人生』(1914(大正三)年)、特にそこに収録された「ヂョルヂ・ハアバートと田舎牧師の生活」である。著者の柏井園は1870年高知県に生まれ、中学在学中に受洗、同志社普通学部を卒業の後、1903年に渡米し、ユニオン神学校で2年を過ごしている(『著作集』別巻、295-6)。柏井は日本のプロテスタント教会の源流である横浜バンドの植村正久の門下で、自身牧師また神学者として活躍した(『著作集』7巻、114)。

柏井はまた西洋文学の紹介者であった。植村が1911(明治四十四)年に創刊した「宗教及び文芸」誌上でもっとも活発な執筆者のひとりとして活躍し、また日本YMCA同盟の機関雑誌「開拓者」の主筆も務めている。著作のなかでは東西の古典をはじめ(『著作集』別巻、305-6)、コールリッジやロバート・バーンズ、また『ロビンソン・クルーソー』(同306)などの文学作品に多数言及している。柏井はとりわけダンテに深い関心を抱いていた(同300)という。斎藤によれば柏井は「文筆の才に長じ」「わかりやすい、ありふれた言葉の組み合わせから成る適切な表現に不思議な魅力を受けて、読者を感動させる文章を書く才能」がゆたかであった(『著作集』7巻、607-8)。

牧師が欧米の文学、特に英米文学を紹介するということは当時広く行われていた。福原麟太郎⁽⁶⁾はこの頃の日本の英米文学を振り返り、内村鑑三や植村正久の活躍に触れて、明治中期の英米文学はキリスト教と歩調をあわせるようにして普及していったと述べている。牧師が英米文学を好んだ理由には、同時代の英米の作家、たとえばエマソンやカーライル、あるいはロングフェローに、道

徳的な要素を容易に読み取ることができた点をあげ、「牧師はそれを利用して説教することが出来たし、文学的な青年はそれによって己の魂を磨くことが出来た」(296)という。しかしこの関係はワイルドなどの文学が普及するにつれて衰えていったと続ける。道徳的な思想が文学作品に見出されなくなったためである(297)。

キリスト教がこの当時、文学を志す青年に多大な影響を与えたことについては、野口武彦氏が次のように簡潔に記している。「明治の青年文学者の大部分はキリスト教の感化を受けた。よしんば後に信仰を捨てたにしても、その圧倒的な影響下にあった。キリスト教への接近、そしてむしろそれからの離反が、精神形成にあずかって力あったといっても過言ではない。そしてこの場合、宗教としては仏教ではなく、思想としては西洋哲学ではなく、キリスト教でなければならなかった」⁽⁷⁾。

また忘れてならないのは雑誌「文學界」である。この雑誌には島崎藤村や平田禿木、北村透谷などが同人として活躍し、矢野禾積によれば初版2500部を売りつくした⁽⁸⁾。創作を掲載する一方で西洋文学の紹介も行い、新しい文学を主導する雑誌として読者の注目を集めた。同人の習得した外国語は英語だけであったというから、英米の作品が多く紹介されることになったが、そのほかの国々の作品にも親しんでいたという(2)。

『基督と人生』はこのような時代に出版された。この著作は、タイトルのとおり、取り上げる話題がすべてキリスト教信仰に関わるものである。けれども以上に述べたようにこの当時キリスト教が日本の若者に与えた影響は現在と比べものにならないくらい大きかったのであり、少なくない読者に親しまれたものと考えられる。

さらに重要なのは後で述べるように柏井が植村と並び英文学者斎藤勇に影響を与え、その斎藤のハーバート像が一般読者に広まったという点である。したがって柏井のこの著作は、後のハーバート像を形づくる基礎となったと考えられるのである。

4. 柏井園のジョージ・ハーバート

「デオルヂ・ハアバアトと田舎牧師の生活」は、「デオルヂ・ハアバアトは理想的の田舎牧師と云はれし人なり」の一節で始まる。その後数行をおいて、「彼は又宗教詩人なり」と続く(276)。ここに端的に現れているように、柏井はハーバートを詩人であるよりもまず宗教者として紹介した。もともとが東京神学社で行われた卒業式での講演ということもあり、聴衆である神学校の卒業生、つまり、これから牧師としての道を歩む若い聞き手に、柏井はハーバートという理想的な「田舎牧師」の姿を見せようとしているのである。このことはまたハーバートが牧師の心得を説いた*The Priest to the Temple*やIzaak Waltonの書いたハーバートの伝記に柏井が多く言及していることにも表れている。実際、柏井はこの講演の半分以上をWaltonの伝記によって執筆していることが記述の分量から推測される。

しかし詩人としてのハーバートが軽視されているわけではない。それどころか柏井はハーバート

の詩を広く読んでいるのであり、そのことは以下の一節にうかがうことができる。

ハァバアトは詩人としては大詩人の群に入るを得ずと雖も、其の作は敬虔の精神に満てり。此の時代の詩に有り勝ちの弊なるが形に泥み不自然なる着想を用ふる所ありと雖も、單純にして清美なる歌亦少からず。短篇に良きものあり。(中略) 日曜日を歌ひ、會堂の戸口と窓を歌ひ、朝夕の祈禱、一年折々の祭りを歌ふ、いづれも作者の高雅なる氣品を反映し、且つ俗を脱せる教會の空氣を愛する念に満てり。(276-77)

ここで柏井はふたつの点を強調している。ひとつは、ハーバートが「大詩人」ではなく、また「不自然なる」コンシートを用了という欠点がありながらも、敬虔な精神を持ち、「單純にして精美なる歌」を書いたという点、もうひとつは、タイトルは明示されていないけれども、ハーバートの一連の教会詩および教会で行われる行事を主題にした詩に触れることで、ハーバートの詩と教会との結びつきを強調している点である。「日曜日…會堂の戸口と窓…朝夕の祈禱、一年折々の祭り」は、それぞれハーバートの“Sunday”、“The Church-porch”、“The Windows”、“Mattens” “Even-song”に対応している。これらの詩はこの詩集の全体の構成に関わるものであるから、技術的な特徴とも考えられるはずだが、柏井は内容だけに注目している。

このような紹介の後、柏井は“Virtue”⁽⁹⁾を引用する。第一連の原文とその訳文を記し、残りの連は要約的に紹介している。

Sweet day, so cool, so calm, so bright,

The bridal of the earth and sky,

The dew shall weep thy fall to-night,

For thou must die.

美しき日なるかな、かくも涼しくかくも静に、かくも麗（うららか）なり。天と地を契（ちぎり）を結ぶ日なりけり。今宵露落ちて今日の日の果つべかりしを傷むらん。(277-8)

柏井はこのように第一連を原文で引用し、流麗な文語調の訳文を添えている。この訳文は同時代の聖書の訳文と比べても遜色のないものであろうが、柏井はこれ以上翻訳は行わず、残りの連を次のように要約する。

[ハーバートは]次に薔薇の花も、花咲く春も皆去り行くべきことを歌ひ、ただ美しく徳ある靈魂のみぞ滅びず、よし全世界は灰燼となるともこれのみは生くべしと云へり (278)。

この要約文も斎藤が述べたような柏井の文筆の才をあらわすものであろうが、この詩を柏井が取り上げたのは、「美しく徳ある靈魂」のみが永遠に不滅であるという最終連の主題が柏井の描くハーバートにふさわしいものであったからと考えられる。柏井は「今夜諸君とともに此の有徳なる人の生涯を考ふることによりて徳の一字を念頭に鮮やかならしむるに勉むる所ある機会とならば此話も亦徒爾ならずと云ふべし」(279)と述べているのである。

この“Virtue”という詩は、ハーバートの作品のなかでも、内容的にもまた技巧的にも理解しやすい、柏井のいう「単純にして清美なる歌」のひとつであり、まさに柏井の描く徳高い田舎牧師ハーバートの姿にふさわしいものである。他にこの講演で紹介されている詩には、“The Odour”「香り」、「Affliction」「悩み」などがあるが、いずれもハーバートの信仰にもとづいた詩としてとりあげられている。このように柏井はハーバートの詩をキリスト者としての徳を歌った作品として解説したのである。

こうして柏井のハーバートの紹介は、主にその人物に重点を置いていたとはいえ、詩作品に流麗な訳文を付けるなど、すぐれたものであったと考えられるであろう。当時、キリスト教と英文学が道徳によって深く結びついていたという時代性を考えれば、敬虔な宗教詩人として紹介するのは自然であるし、またこれは決してハーバート像の歪曲ではない。むしろ一面で本質を突いているのである。けれども詩人ハーバートをその全体性において捉えることを目指すのであれば、このような紹介だけでは不十分ではなかろう。ハーバートの詩人としての技術は、当時流行していたコンシートをういた、あるいは「形に泥み不自然なる着想を用ふる」、と一言で片付けられてしまうようなものではない。このような限界は、柏井にとってハーバートが、あくまで敬虔なキリスト教信者のひとりであり、詩人としてのハーバートを議論の中心にすることがなかったことに由来すると考えられる。

5. 斎藤勇のハーバート

この柏井の影響を受けたのが東京帝国大学で英文学を講じた斎藤勇である。著作集別巻の年譜によると、斎藤勇は1887(明治二十)年、福島県に生まれ、1906(明治三十九)年、19歳で受洗、1908(明治四十一年)より東京帝国大学に学び、同じころ富士見町教会で初めて植村正久の指導を受けている。その後1923(大正十二)年にイギリスに留学するまで植村に師事し、英文学の思想的側面についてはこの植村から学んだという(『著作集』6巻、417-418)。斎藤は自身の英文学観に触れて次のように述べている。「文学は読者を楽しませながら、せんずるところ、いかに生くべきかを、いつのまにか考えさせるべきものである。そして英文学にはそういう作品が多い」(462)。これは植村や柏井ら同時代の牧師たちが英文学に親しんだ理由とさほど変わらない、徳を中心とした古典的な文学観である。

斎藤は自身の信仰に大きな影響を与えた数名の人物のうちに、上で触れた植村と柏井の二人を数

えている（『著作集』別巻、295-312）。柏井とは同じ植村門下ということもあり、親しく手紙を交換する間柄であった（298）。おそらくこうした関係から、斎藤の著作は柏井の影響を残すものとなった。様々な著作でハーバートについて書いているが、ここではもっとも広く読まれた『思潮を中心とせる英文學史』（1927（昭和2）年初版）を中心に、斎藤のハーバート像をみてみたい。ハーバートについては「PURITANISMの時代」の「“METAPHYSICAL” Poetry」の項で紹介されている。

その指導者 Donne の後には、先づ George HERBERT（1593-1633）が、國教會の田舎牧師として静かに、落ちついた敬虔な心を以て書いた百六十九の短詩を集めた *The Temple*（1633）が出た。地味で真心のある彼は人々が見過しにする小さい事柄にも意義を認めて、*Virtue, Prayer, The Pulley, The Misery, The Collar, The Quip* などを書き、以て “The perfect well-bred gentleman”⁽¹⁰⁾ たることを表はしてゐる。（159）

ここで斎藤はメタフィジカル・ポエツの Donne の後継者としてハーバートを紹介し、そうすることでダン一派としながらも、技術的・形式的なことにはいっさい触れず、結果として「敬虔な心」「物静か」「真心」を強調していることに注目すべきである。この本には詩の原文は引かれていないが、この『英文學史』の姉妹編の『英國詩文選』⁽¹¹⁾ には掲載されている。『英國詩文選』は『思潮を中心とせる英文學史』で紹介された作家の作品を実際に読むために編まれたもので、「まえがき」にあるとおり『英文學史』に書かれていることは繰り返さないという方針に基づいているため、作家の説明もなければ思想的背景などに関しても一切説明がない。ごくわずかの語注が加えられている他は、文字通りの詩文集である。ここにはハーバートの “Virtue” 一篇が収録されている。訳文は添えられていないが、これは柏井の紹介したのと同じ詩である。他に斎藤には『英詩概論』⁽¹²⁾ があり、この著作中、ハーバートは二箇所で触れられている。いずれも “Prayer” についてであり、この詩が比喩を並べていることにひとこと触れているが（234）、斎藤の示す形式への関心はここまでであった⁽¹³⁾。したがって、わずかに形式への関心がうかがえ、またダンとの関連に言及しているけれども、斎藤もまたハーバートを「國教會の田舎牧師」「敬虔な心」という言葉で紹介し、同じ詩 “Virtue” を掲載することで、柏井の作り上げたハーバート像をほとんど受け継いだのである。

6. 同時代の英文学史

大正から昭和初期にかけてのこの時代には、斎藤以外の英文学者も文学史を上梓している。すでに述べたように英文学はキリスト教と深い関係を持ち、そのキリスト教は明治の青年に深い影響を与えたことから、英文学は当時一般の知識人の関心の対象になっていたと考えられる。したがって、英文学史のテキストは、多くが大学生向けに書かれているけれども、それと同時に一般読者の教養の書として読まれることがあった⁽¹⁴⁾。

1923（大正十二）年には、小日向定次郎の『英文學史－黎明期よりミルトン時代まで』が文献書院より出版されている⁽¹⁵⁾。この本の「第三章 ミルトン時代の詩と散文」の「第二節 ジョージ・ハーバートとその『行脚』その他」で、小日向はまずハーバートを「哲學的詩人」と紹介し、短い伝記を記したあと、「『聖堂』（“The Temple”）といふ一卷の詩集は、微塵も俗臭を止めない、瞑想的な気品の高いものばかりである。巻頭を飾る『御寺の門』（“The Church Porch”）のその箴言の一つを挙げて見やう。再讀三讀衣襟の自ら改まる心地がする」（450）と書き、“The Pulley”、“Employment”、“Misery”、“The World”、“The Glance”、“The Pilgrimage”等に触れる。が、原文も訳文も記されていない。ハーバートは「靈山の奥深く隠くれた」（453）と書く小日向もまた、ハーバートを「敬虔な宗教詩人」ととらえ、内容だけに注目し、形式に関心は向けていないのである。

この時期に活躍した英文学者で、ハーバートの紹介に异彩を放つのは上田敏である。上田は「十七八世紀英文學史」のなかでハーバートに触れている。これはもと京都帝国大學文科大学で1914（大正三）年に行われた特殊講義の口述を、竹友藻風ら出席者がノートに筆記し、後にそれを編纂して、1930（昭和五）年に『上田敏全集』の第7巻のうちに収録し出版したものである⁽¹⁶⁾。

上田はまずハーバートの人となりを Walton の伝記に基づいて紹介し、その後 *The Temple* についてまず言及するのが、その形式的な側面である。

この “The Temple” は奇態のことには詩が church の architecture によって配列されて居る。初めに The Church-Porch あり次に The Church あり、後者の中に種々の Church festivals, Matins（朝の勤行）Sunday 等がある。又 “The Quip”（dance）、“The Pulley” の如き建築にも儀式にも関係なきものも這入って居る。約り大別は建築の順序、小分けの方は教會の祭等によつたものである。全體百六十餘篇その中には種々の metrical experiments がある。Stanza も長短錯綜している。（217）

このように詩集全体の構成また韻律やスタンザについて述べたあと、さらに上田はその詩の特徴を symbolism, soul scrutinizing にあるといい、「Donne の影響を受け不思議な比喩人の気付かぬ類似を挿入した」と書く（218）。一方でその内容に関しては、「絶對的價值」ではヴォーン、クラシヨーに劣り、また後のクリスティナ・ロセッティのように感動を与えはしないと書く。原文を紹介しているのは、“Prayer (I)” の一節

“Church-bells beyond the stars heard, the soul’s blood,
 The land of spices, something understood”

である。訳文は添えられていない。これは、名詞の羅列のみで書かれた技巧的な作品のひとつであ

る。こうして上田は「奇態のことには」と書きながらも、ハーバートの詩人としての技術的・形式的な側面を強調した。またその弟子の竹友藻風も上田と同じように形式的な側面に注目している。ただし竹友ははるかに否定的である。

上田敏に師事した詩人・文学者の竹友藻風(1891-1954)は、1936(昭和11)年に出版した『英文學史 670-1660』(川瀬日進堂書店、1936(昭和11)年)において、ハーバートを宗教詩の項で扱い、その詩をイギリスにおける一プロテスタントとしての自身の生活に終始していると書く(434-5)。したがって作品の特徴としては何よりもイギリス的な宗教的情調をあげ、第二に古風で趣のあるコンシットをあげている(435)。竹友は形式について、“Easter Wings”や“The Altar”のような形象詩には価値がないと断じ、またアクロスティックなどを「幼稚な趣味のあらはれ」(437)と指摘する。オリジナルのレイアウトを再現して“Easter Wings”を載せているが、それは否定するためなのである。かわって称揚されるのが、“Jordan (1, 2)”で、これらは「最高の理想を述べたもの」であるという。つまり竹友は形式に注目しながらそれを批判し詩の内容を賞賛する。ハーバートの特徴として「純一・清明、聖者の如き透徹した風格」(439)と述べるとき、竹友のハーバートは柏井・斎藤とさほど変わらないものとなっている。

形式に注目してハーバートを紹介した英文学史がある他に、さらに一步を進めて、ハーバートの世俗的な面に着目する評者も現れた。石田憲次である。1941(昭和十六)年に出版された研究社英米文學語學講座シリーズの1冊、『英文學主潮史 II(十七・八世紀)』(東京、研究社、1941年)で、石田はハーバートの形式的な側面とともに世俗的な側面を強調した。石田はハーバートをダンの影響を深く受けた詩人として紹介し、聖者としてのハーバート像に触れながらも、ハーバートは実は気の強い、気性の荒い人であったといい、「これは宗教人としての短所のやうであるが實は非常な長所である。彼の宗教詩はその故に廣い根柢の上に立ち、少しも危なげな氣がない」(14)と述べる。このような観点から“The Collar”と“The Pearl”に触れ、これらを「世間並みに血あり肉ある人間としての彼を偲ばせる傑作である」と書く(14)。ハーバートが英国国教会の中庸を体現した詩人であったということを認める一方で、ダンにみられるような奇抜な比喩、および率直な対話的表現を用いているという点、また116篇の詩を異なった韻律で書いた点に触れ、その優れた技術を賞賛している。

こうして大正から昭和初期にかけてのイギリス文学史は、柏井・斎藤のように敬虔な宗教詩人ハーバートを描く一方で、上田敏や竹友藻風のように、その形式や技法に注目することもあれば、さらにまた石田憲次のように、世俗の詩人としてのハーバートを論じることもあった。つまり多様に評価されていたのである。けれどもこれらのうちで支配的になったのは、柏井・斎藤のハーバートであった。斎藤の『思潮を中心とせる英文学史』は、1927年に発行されて以来、何度もタイトルを変えて、改訂増補第5版が1974年に発行されるほどのロングセラーである⁽¹⁷⁾。また斎藤の名は現在でも研究社小英文学叢書の『入門英米詩選』(1972年初版。2000年23刷)、また岩波文庫の『イギリ

ス名詩選』(1990年発行)などで言及されているのである。こうして斎藤の『英文学史』は後々まで影響力を持ち続け、「敬虔な宗教詩人」としてのハーバート像が人々の記憶に残る機会を与え続けた。一方上田の著作集は1928(昭和三)年から1931(昭和六)年にかけて再版されたものの、後に1978年から1981年にかけて『定本 上田敏全集』全10巻が出版されただけである。また石田の『英文學主潮史』を含む研究社の「英米文學語學講座」シリーズは1951年に「新英米文學語學講座」と名称を変え、それにともない執筆者も巻の構成も変わったので、再版はない。

7. テキスト・翻訳詩集のハーバート

文学史の記述以外に、英米文学を愛好する知識人にハーバートに親しむ機会を与えたものは、語学テキストや翻訳である。まずハーバートの作風をより直接的に伝えられる語学テキストについては、この時期、すでに上で述べた斎藤の『英國詩文選』以外に、1921(大正10)年に刊行が開始され1932(昭和7)年に完結した「研究社英文学叢書」シリーズが読まれていた。1929年(昭和四)年に発行された同シリーズの1冊 *The Golden Treasury*⁽¹⁸⁾ は、ハーバートの詩から“The Pulley”1篇を“THE GIFTS OF GOD”というタイトルに替えて掲載している。注釈には、年表的に経歴を記したあと、「この人の名は主として、その歿後に公にされた *The Temple* (1633) と題する宗教詩集を以って知られている。この詩もその中の一首で、原の題目は‘The Pulley’ (‘滑車(せみ)’)とある。之を用いて神が人間の向上をはかる一方便から付けたものである」(396)という紹介がある。これはPulleyのイメージに託した詩を掲載することで、暗にハーバートの技法に注目を集めているとはいえる。「宗教詩集」の言葉もあり、したがって形式・内容のどちらも見せているということはできる。けれどもこの1篇の詩で宗教詩人であることは伝わっても、ハーバートの詩人としての多様な技術を理解することは困難である。

翻訳詩集は、1882(明治十五)年『新体詩抄』、1889(明治二十二)年に森鷗外の『於母影』、1894(明治二十七)年に大和田建樹の『欧米名家詩集』⁽¹⁹⁾ などが出版され、明治大正時代に広く読まれていた。しかしハーバートはこのような訳詩集にほとんど掲載されることがなかった。大和田の『欧米名家詩集』はイギリスの詩を多く収録し、シェイクスピアやミルトン、またマーローやヘリック、ラブレイスの作品まで載っているが、ハーバートは見られない。1902(明治三十五)年の山県五十雄訳註『英米詩歌集』⁽²⁰⁾ もハーバートの詩を掲載していない。

ハーバートの詩を掲載した数少ない訳詩集のひとつは日夏耿之介の『英国神秘詩鈔』である。この訳詩集は1922(大正十一)年、アルスから出版され、解題として「英國神秘詩謡の鳥瞰景」が付されているが、そこで日夏は、ハーバートを敬虔な田舎牧師、聖者のような詩人として紹介している。訳詩は2篇、「對話」(“Dialogue”)と「復活祭の歌」(“Easter”の最後の三連のみ)が収録されている。「對話」の最初の二連は次のように訳出されている。

人間

至情至愛の御救世主様私の魂に
 所有の値といふものさへ御坐りましたら
 その時は早速どのやうにぐらついてゐる考へでも
 きつと制御いたしませうず
 だが、この汚れ切つた御主様の不仕合者に
 このわしがいくら氣を付けても苦しみまして
 利得まうけと申す奴をよう呉れませぬ其時は
 嬉しいも望みもありはしませぬぢや？

救世主

わが子よ 御身の錘りと量りとの釣合は
 何であるのか
 「そちはわがものぢや」とこのわしが云うたなら
 わが寶には指をさすまい
 御身の持つてゐる利得が如何程の高に上らうと
 人間のために賣された神だけが只一人それを調べる事が出来るのぢや
 あの利得はわしにメ高あなが交付されてゐるのぢや (10-11)

注釈もなく対訳形式でもないこの訳詩は、たしかに対話形式の詩を対話形式で翻訳していることから、その形式は伝わるし、また神と人との関係を金銭のイメージで表していることを理解することはできる。けれどもそれ以上ではない。翻訳詩に韻律を含めて原詩の形式を再現するのは一般に困難であり、したがって翻訳で作品を読むときには、対訳形式であるかまたは詳しい注釈がついている場合を除いて、形式に注意が向けられることは少ないのである。

後にこの詩は、日夏耿之介、鈴木信太郎、石川道雄、神西清が「鑑選」した『名詩名譯』に再録される。この訳詩集は東京創元社の「創元選書」の1冊として、1951（昭和二十六）年に初版が発行された。編者以外の訳者には、上田敏、夏目漱石、蒲原有明、内村鑑三、永井荷風、三好達治、堀辰雄、小林秀雄など、著名な文学者が名を連ねている。ハーバートの詩は「對話」1篇が日夏の訳で再び収録されている。日夏は訳詩の冒頭でハーバートを「同苗エドワドの舎弟。聖詩集「聖堂」及び散文「聖堂沙門」あり。神祕派詩人の有力の一人といはる」（14）と簡潔に紹介しているが、前者と異なり解題を収録していないこの詩集では、「神祕派詩人」という言葉とハーバートが直接的に

結び付けられ、詩の意味内容に関心が集まったことであろう。

訳詩においては、比喩や引喩は伝えることができるが、複雑な押韻やアクロスティックなど原文の単語のつづりや発音に依存する手法は、ほとんど再現することができない。翻訳詩は主に内容を読むためのものであるということは否定できないであろう。またハーバートの場合、偏らない紹介をするためには、形式的な側面を強く出す詩を取り上げることが必要であるが、文学史にも翻訳詩集にもそのようなことはあまりなかった。翻訳詩では、文学史と異なり、訳文だけを掲載するため、ハーバートの技術を伝えることは難しい。したがって翻訳詩もハーバートの形式や技術を十分に伝えることができず、結果として宗教詩人ハーバートの姿を印象づけることになった。

8. 結 論

こうして大正から昭和初期に柏井・斎藤の描いた「敬虔な宗教詩人」ハーバートは、同時代の文学史にさまざまな解釈がありながらも、一定の影響力を保ちつつ伝わっていったのである。拙論では昭和時代の中期以降については論じることが出来なかったが、ひとつだけ触れておきたいのは、石井正之助氏の業績である。石井氏は、昭和中期に、「ジョージ・ハーバートと英国教会」という聖俗両面にきわめてバランスのよいハーバートの紹介をする⁽²¹⁾と同時に、平凡社の『世界名詩集大成』⁽²²⁾で5篇の詩の翻訳を行っている。この訳詩集には「ヨルダン」(“Jordan”)「徳」(“Vertue”)「生命」(“Life”)「首輪」(“The Collar”)「愛」(“Love”)が収録されている。ハーバートの紹介も宗教的な側面に偏っていない。わずかではあるが語注が付けられていて、そこにいくつかの語の多様な意味について若干の解説をしている。

けれども他方では、この時代を経て、平成の現在に至ってもまだ柏井らの宗教的側面に偏ったハーバート像は根強く残っているのである。故・平井正穂氏の編集した岩波文庫の対訳詩集『イギリス名詩選』(1990年)は「はしがき」に斎藤への謝意を記してあり⁽²³⁾、ハーバートの詩を2篇“The Flower”「花」と“Love (III)”「愛」を収録している。脚注には「彼の宗教詩は、敬虔な信仰者がしばしば経験する、救われた喜びと神から阻害された苦しみとの、交錯した心理を的確に表現している」と記してある(69)。注釈では「マルコ伝」に言及するなど、キリスト教に関する事柄の解説は豊富だが、しかし心理をどのようにして的確に表現しているかの説明はない。柏井・斎藤以来の宗教的なハーバート像と矛盾しないのである。また現在でも入手可能な語学テキストには、『入門英米詩選』(1972年初版。2000年に23刷)があるが、その「はしがき」には、この本の詩の選択は斎藤勇が行った、と記してある(iii)。掲載する“Love (III)”の注釈は宗教的な引喩の解説がほとんどである。大正時代に作られたハーバート像はこうして今も生きているのである。

冒頭で触れた鬼塚氏の翻訳は詩人の代表作の全体を初めて日本語で読むことを可能にしたという点で画期的であった。“The Alter”や“Easter Wings”など、形象をかたどった詩の詩形を訳文で再現し、また“Ana {Mary/Army} gram”は訳詩の下にこの原文タイトルを掲載することで、それとわ

かるようにしてある。鬼塚氏自身がそう記しているように、たしかに翻訳詩であるためハーバートの多彩な実験を必ずしも十分に伝えるものではないかもしれないが⁽²⁴⁾、しかしこの訳本はハーバートの全体像を見せてくれる画期的な翻訳である。これらの成果から、より多くの日本人が、新しいハーバート像を描くようになるのはこれからであろうか。

注

- (1) 中野好夫、朱牟田夏雄、平井正穂編『斎藤勇著作集』別巻 東京、研究社出版、1975-78年。300頁。本文中では『著作集』と略記。
- (2) ジョージ・ハーバート著、鬼塚敬一訳『ジョージ・ハーバート詩集 教会』 東京、南雲堂、1986年。『続 ジョージ・ハーバート詩集-教会のポーチ-闘う教会』東京、南雲堂、1997年。なお本論でハーバートの詩に訳文を付けるときには前者を参考にした。
- (3) 石井正之助「最近のジョージ・ハーバート研究」『英語青年』124巻7号（1978年10月）、426-429頁。
- (4) エコー詩とは、問答のような形式の詩で、行末のシラブルがこだまのように繰り返されて、問いと答えが押韻するものをいう。詳しくはPreminger, Alex and T. V. F. Brogan ed. *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Princeton: Princeton UP, 1993. "ECHO VERSE" の項を参照。
- (5) Herbert, George. *The Works of George Herbert*. Ed. F.E. Hutchinson. Oxford: Clarendon Press, 1945. のイントロダクションを参照。
- (6) 福原麟太郎「日本の英学（歴史）」『福原麟太郎著作集』第9巻。東京、研究社、1969年。277-310頁。
- (7) 野口武彦「煩悶、高揚、そして悲哀-近代日本の『批評』の発見」柄谷行人編『近代日本の批評。3 明治・大正篇』東京、講談社、1998年。所収。17頁。
- (8) 矢野禾積『「文学界」と西洋文学』京都、門書房、1951年。10頁。
- (9) この "Virtue" という詩は Hutchinson の版では "Vertue" と綴られているが、ここでは柏井の表記に従う。
- (10) この言葉を斎藤はコールリッジから引用している。
- (11) 斎藤勇『英國詩文選』東京、研究社、1935年。
- (12) 斎藤勇『英詩概論』東京、研究社出版、1935年。
- (13) "Prayer (I)" は次のように始まる。
Prayer the Churches banquet, Angels age,
Gods breath in man returning to his birth,
The soul in paraphrase, heart in pilgrimage,
(祈りは教会の宴、天使の長命、
生まれたところへ帰り行く、人に宿る神の息
魂のパラフレーズ、心の巡礼)

このように「祈りは」に対する定義の言葉がさまざまに言い換えられ、

Church-bells beyond the stars heard, the soul's blood,
The land of spices, something understood.
(星のかなたに聞こえる教会の鐘、魂の血
香料の土地、なにか理解されるもの)

で終わる。述語動詞を用いずに最後まで書かれている。

- (14) たとえば1948（昭和二十三）年に全国書房から発行された平田禿木の『英文學史講話』は、「序」に「青

少年學徒や一般讀書子」を対象とする英文学史であると編纂者の矢野峰人が書いている。平田禿木『英文学史講話 上巻』京都、全国書房、1948。矢野峰人の「序」を参照。

- (15) 小日向定次郎『英文学史一黎明期よりミルトン時代へ』京都、文献書院、1923年。
- (16) 上田敏『上田敏全集』第7巻 東京、改造社、1930年。「編集後記」を参照。
- (17) 斎藤勇『思潮を中心とする英文学史』東京、研究社、1927年。2年後の1929年に『思潮中心の英文学史』と改題。のち『英文学史』、『イギリス文学史』と名称を変更し、改訂増補第5版が1974年の発行。
- (18) Palgrave, Francis Turner. *The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*. 東京、研究社、1929年。
- (19) 大和田建樹編『欧米名家詩集 上・中・下』東京、博文館、1894年。
- (20) 山県五十雄訳註『英米詩歌集』東京、内外出版協会、1902年。
- (21) ピーター・ミルワード・石井正之助監修『形而上詩と冥想詩』ルネッサンス双書3 東京、荒竹出版、1976年、83-123頁。
- (22) 加納秀夫訳者代表『世界名詩集大成9』東京、平凡社、1959年。
- (23) 同書14頁を参照。編者平井氏は斎藤勇の娘婿であり、斎藤の後を継いで東京大学で英文学を講じ、また洗礼を受けた同じキリスト教徒であったということから、深い影響を受けていると考えられる。
- (24) “Heaven”について鬼塚氏自身が「私とこだまとの対話形式でこの詩は進むが、こだまの科白は全て直前の私の科白の末尾の符となるように押韻がなされている。努めてこの詩人の意図を訳出したいと念じたがほとんど成功しなかった」(472) と述べている。しかしこれは翻訳詩というものの限界であると思われる。続編の『教会のポーチ・戦う教会』でそうしたように、対訳の詩集であれば、このような欠点を補うことができたのではなかろうか。